

ESD レポート

Education for Sustainable Development

vol. 12

2007 秋

2007年10月12日発行

NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面するさまざまな課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」——それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことをめざして、「国連持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)」が、2005年からスタートしています。

シリーズ **学びの場をデザインする**

「むら」のくらしがぼくらの先生！

緑のふるさと協力隊

生き方を模索する若者たち、過疎に悩む農山村——。NPO 法人地球緑化センターのプログラムは、農山村に興味をもつ若者を、地域活性化をめざす地方自治体へ一年間派遣するというものです。一年間という長い時間をかけた、イベントではない、「くらし」を通じた交流が、若者に生きる力や持続可能なくらし方・社会につながる価値観をもたらします。と同時に、農村にも元気を与え、地域の魅力再発見、自信回復につながっています。

<キーワード>

都市と農村交流、生き方・暮らし方、文化・知恵の伝承

<関係者>

主要関係者：コーディネーター役のNPO（地球緑化センター）、自治体、参加者（隊員） 地域住民 資金・助言・広報・運営支援：緑のふるさと協力隊推進会議、隊員OB/OG、大学、省庁

大分県豊後大野市 かやを葺く



NPO 法人地球緑化センター（GEC）の新田均さんと金井久美子さんは、都市化と農村の過疎化の問題、都市型の社会で追いつめられる青少年の問題の解決方法を探るなか、①地域の自然に根づいた緩やかな人間関係や、人間と自然の「いのちの連鎖」が存在している農村に、持続可能な社会づくりのためのヒントがある、②社会を変革するには、人間が内面にむかって反省していけるような学びが重要、ということを考えていました。そして1994年に、都市の若者ととも農村の「持続可能な地域づくり」をする活動に、「自己変革につながる学び」の要素を織り込んだ事業として「緑のふるさと協力隊」が企画されました。

一年間の農村での暮らし

「緑のふるさと協力隊」は、毎年、都市部の18～40歳までの20～30人の「隊員」を選出し、受け入れを希望する日本国内の20～30の農村部の自治体に一年間派遣します。隊員は、生活費5万円が支給される以外は、受け入れ先自治体が用意した活動に無報酬で従事します。派遣先での活動に伴い、派遣直前・派遣中・派遣直後の3回の研修への参加、月次レポートの提出、同期隊員間で持ち回り発行するニュースレターの作成が義務づけられています。派遣先での活動内容は、農林業や、派遣先自治体の公共施設での手伝い、イベントやお祭りの手伝い、特産物や工芸品づくりの手伝いといった地域おこし関連の活動です。



若手県住田町 地区のお祭りに参加

特定非営利活動法人 地球緑化センター(GEC)

住所：東京都中央区八重洲 2-7-4 清水ビル 3F
電話：03-3241-6450 FAX：03-3241-7629
URL：http://www.n-gec.org/

地球緑化センター（Green Earth Center）は、緑のボランティアを育て、その活動を応援する団体です。個人やグループをはじめ、行政、企業、教育機関など、さまざまな人々を対象に、多様な応援を行なっています。

「むら」のくらしは全力投球！

2005年に隊員として徳島県上勝町へ派遣され、
大学卒業後この地で暮らしている上野あやさんより



私は上勝町で、しいたけ栽培と木材加工所、また個人農家の手伝い、それから町内イベントに参加しました。忙しい毎日でした。事業の活動以外にも、草刈りなどの地区活動や、季節ごとの祭り、スポーツ大会といったイベントや、準備もありました。毎朝私は、60代の「きみちゃん」と「ふみちゃん」の、餅つきの手伝いに行きます。家に近づくにつれて二人の笑い声が聞こえてきます。二人は、陽のあがる前から薪で火をおこし、臼と杵でお餅をつき、直売所に出荷します。茶摘み、木に登ってユズ採りもします。そして夕方であれば男顔負けにお酒を飲みます。どの瞬間も真剣で全力投球です。

この町は、町全体がひとつの「学校」「カンパニー」「森」みたいな感じがします。自然界では、大きな動物も鳥も、虫や微生物も、みんなが役割をもち、つながりながら生きています。同じようにこの町では、一人ひとりが役割をもち、その個性が最大限に活かされ、頼られる存在になっています。

東京にいるときは、意思がなくとも生きていけました。必要な物があれば、店に行けば手に入り、物も、なんとなく持ちあげれば、持ちあがる「物」ばかりでした。私は、自分がどうしたいのか、ということより、ほかの人と一緒にいることを大切にしていました。上勝は、それでは生きていけません。物がなければ自分たちでつくり出します。いつも危険と隣り合わせの農林業は、「なんとなく」でやっていたら命を落とします。なんとなく持ったのでは、木材も鶏糞の袋も持ちあがりません。「よしよ」と腰を使って、または知恵を使って真剣に「持つ」のです。

若者と地域双方の学び合い

この事業に参加した隊員からは、地域に根ざした伝統的な知恵や、いのちの連鎖、豊かな自然を基盤にした地域の人びととのつながり、多様な人びとの共存と、多様な生き方の尊重といったことについて学んだ、という声が寄せられています。この事業はまた、参加隊員のその後の人生の選択にも大きな影響を与え、事業開始以来、360人中141人が派遣終了後に農村地域に定住しています。

一方、農村の人びとにとっても、地域外の隊員との交流が、地域の伝統や文化、自然の魅力の再発見へとつながる、あるいは、地域や自分自身の生き方に関心をもってもらうことが、地域で生きる喜びにつながっているそうです。

コーディネーターの存在

派遣される隊員が、派遣先の文化や環境、方言といった壁にぶつかることが多くあります。困難にぶつかる隊員たちが、自分の力で困難を乗り越え、人間として大きく成長するように支援していくことが、コーディネーターである金井さんの最大の役割だと語っていました。金井さんは、隊員が困難にぶつかるたびに、ひたすら隊員や地

域の担当者の声に耳を傾け、隊員を地域の適切な人や場につなげながら、隊員が、自力で課題を克服する時期や場面をつくっています。そして、隊員が1年間の生活を終えて、「派遣先の土地に来てよかった」「自分の故郷です」という言葉に、コーディネーターとしてもっとも喜びを感じるそうです。

まさに、この「緑のふるさと協力隊」は、農村における「くらし」そのものを、持続可能な社会を育む「学びの場」としてデザインしなおし、都市の若者と農村に住む人びとの双方にESD的な学びをもたらす事業だといえるでしょう。（取材報告：野口扶弥子）

育まれている価値観やスキル

- (持続可能な) 生き方・暮らし方
- 伝統的な知恵・文化
- 自然への畏敬、つながり
- 主体的な地域への参加
- 昔ながらの人間関係（コミュニケーション）
- 地域の魅力（再発見）

コーディネーターの役割

- 学習者の主体性を尊重した学び
- 現実的課題に実践的に取り組む
- 継続性のある学び
- 多様な立場、世代の人びととともに学ぶ
- 人や地域の可能性を最大限に活かしている
- ただひとつの正解をあらかじめ用意しない

- 事業全体のマネジメント
- 行政への理解促進
- 規制や制度の殻を破る
- 受け入れ自治体と派遣隊員のマッチング
- 参加者のケア

重視されている隊員の手法

持続可能な社会の「実現」というビジョンに、頭と手を使い、心を込めてむかいたい



NPO 法人 えひめグローバルネットワーク 竹内 よし子

ESDは、最初はとてもわかりにくい。しかし、ESDそのものの学びと理解を深めるなかで、社会のあらゆる「つながり」の本質的意味・方向性を問いなおすという意識・行動の変化をもたらすことができる。

当団体は、松山市からアフリカ・モザンビークへ放置自転車を送り、内戦後も現地に残存する武器との交換を行なっている。「銃を鋏へ」と呼ばれるこの平和支援は、「自転車」をキーワードに平和・まちづくり・環境・福祉・国際協力……、と多角的な視点を有し、「持続可能な社会をつくるためには？」を考えながら、動きだすきっかけを開き、市民自らが次の行動へとつなげている。

＊

では、これから先、この「ESDの10年」でなにをめざすのか？——あらゆる人びとが、人として平和な日々を送ることができる、持続可能な社会の実現をめざします——という普遍的な人権・平和を求めていく姿勢を崩すことはない。問題は、その具体的な

方法と手順だ。

まず一つは、行政の枠を超え、分野・セクターを超え、新たな「つながり」を生み、行政や企業とともに、持続可能な社会づくりのためにできることを具体的に打ちだしていく。そして、「ひとづくり」「ものづくり」「しくみづくり」の観点から持続可能な社会づくりへの方向性と流れを創出する、リーダー的人材間の強力なつながりも重要だ。ESD-Jはこのつなぎ役を担っている。

例えば、新たな姉妹都市・友好都市とともに途上国とつながる提案はどうか。地域のNPOと教育関係者、大学が連携し、「国際協力活動」を補助教材として研究・開発し、同時に地域の文化活動や環境保全活動とマッチングしていく。さらに、企業や行政と連携し、経済や政策とつなぐ「まちづくり」へすすめていくことが考えられる。

＊

当団体では実際に、市内の工業学校とモザンビーク支援で連携を進めている。さらに

「ソーラークッカーの普及」を通じた、同校と米国の姉妹都市の学校間交流も準備中である。一方で、環境ビジネスでモザンビークへ進出しようとする地元企業へも連携を働きかけている。アイデアは泉のように湧いてくる。ESDを最初に私に伝えてくださった方に「4H」を教えてもらった。Head（頭＝知識・知恵）、Hand（手＝技術）、Heart（心＝関心）、Horizon（地平線・水平線＝ビジョンをもつこと）が大事だということ。これからの「ESDの10年」は、持続可能な社会の「実現」というビジョンから目をそらさず、頭や手を使い、心を込めてむかいたい。



ESD-J 副代表。愛媛出身。渡英経験、企業・研究機関の勤務経験を経て1998年から市民活動を開始、今年10年目を迎える。現在、NPO 法人えひめグローバルネットワーク、四国 NGO ネットワーク、日本・モザンビーク市民友好協会の代表を務める。

多様な生活文化と地域自治とを尊重するような「E」が大事



社団法人 農山漁村文化協会 清水 悟

教育学者の大田堯氏は『教育とは何か』（岩波新書）で書名どおりの根源的問いを発し、老木が倒れることによってその木の下に位置したタネの生育条件がよくなりタネが芽生えてくる「倒木更新」や、キタキツネが親離れ直前の子どもたちに最後に行なう「実習旅行」、さらにはかつての農耕社会の共同体でなされていた何人もの仮親による地域共同の子育ての習俗などに光をあて、教育の淵源は、鮭の産卵のようにときには個体のいのちを犠牲にしてまでも子孫へのいのちを継承していく「種の持続」にあり、そのために子どもを一人前に育てることが教育の本質ではないかという。

そして、人間や他の動植物の「生」がともにそのうちに包摂される「宇宙の大いなる力」を確認し、人間中心主義から脱却する必要を説いたうえで、文化の伝承をとおりて行なわれる人間独自の種の持続のしか

たや、（各人が選択する余地なくそこに産みおとされたという意味で）「与件」である文化や環境を継承したり変革したりする力の形成、人間の内面からの成長のための学習権の重要性など、人間の教育学習について深い洞察を行なっている。

＊

そこで、大田氏の行論をふまえSDやそのための「E」について考えたとき、各人がそれぞれの場所で自然と調和した持続可能な生産や生活のあり方を模索しそれを社会化するとともに、地球史—生物史—人類史の重層的理解のもと、個性的な地域自然に適応しつつ人びとが築いてきた、世界の多様な生活文化と地域自治を尊重するようなEが大事だと思う。

＊

国家の役割もそれをベースに相対化してみることだ。生物多様性条約につづいて近

年批准された「文化多様性条約」に最後まで反対したのはアメリカとイスラエルだったと古沢広祐国学院大学教授が書いている。利潤極大化を求め、世界の文化を画一化しつつ自由貿易化を強引にすすめる新自由主義の立場からすれば、文化的多様性などは邪魔でしかないようなのだ。世界には貧困の問題をはじめ、持続可能性を妨げる問題が複雑に絡みあいながら山積している。ESDへの取組みで知恵を發揮しあい、実践の糸口をみつけていきたい。



ESD-J 理事。情報共有 PT リーダー。北海道大学卒業後、1970年に、出版による文化運動団体である農文協に入り、雑誌『農村文化運動』『食農教育』などの編集活動や、全国各地の「農家交流会」「食研究会」などの組織化を行なう文化活動に従事。

ユネスコ国内委員会にてユネスコへの提言案を議論

8月30日、第121回のユネスコ国内委員会にて、「ユネスコへの提言案」について議論がされ、以下の6項目を提言することが決まりました。主な内容は、(1) ESD教育プログラムの具体像の提示、進化、発展、普及、(2) ESDの普及・促進、(3) ESDに関する国際協力の促進、(4) DESDのモニタリングと評価の促進、(5) 各国の国内委員会をとおした、各国・地域におけるESDの実施状況の把握・共有、(6) ユネスコの推進体制強化。

また、国内においても、(1) ESD教材・カリキュラムの作成、(2) SDに必要でありながらも、従来の学問領域で捨てられている視点の発掘、学習への反映の検討、(3) 国内のユネスコ関連団体、ESD関連のNPOとのパートナーシップの強化、(4) DESD関連国際会議の開催についての検討の開始、など議論がなされました。(事務局)

環境省 ESD 促進事業 新規に 4 地域採択

環境省の「ESDの10年促進事業」では、8月10日、新たに4つの地域が採択されました。また、昨年度採択された10地域も、本年度は「実施フェーズ」に移行し、各地の協議会で検討してきた「ESDの事業計画」をもとに、具体的なESD事業に取り組んでいます。また、環境省ESDの10年促進事業ウェブサイトも開設され (URL: www.env.go.jp/policy/edu/esd/)、昨年採択された10地域とともに、地域の取組みのプロセスや成果が公開されています。

ESD-Jは今年度も、本事業の全国事務局を受託し、各地域の事業を支援するとともに、「ESDのモデルとなる取組みやしくみ」を地域から学ぶべく、本事業にかかわっていきます。(事務局)

▼本年度採択された4地域

1. 大阪市西淀川区「持続可能な交通まちづくり市民会議 (みんなで考え・つながり・行動するために)」
2. 山口県大島郡周防大島町を中心とした、萩市、山口市、島根県大田市温泉津町、島根県東出雲市広域連携地域「山、海、畑、歴史を守るコミュニティスクールコーディネーター育成からはじまる広域連携ネットワークづくり」
3. 岡山県岡山市京山地区「公民館を拠点とした地域ぐるみのESD活動」
4. 長崎県雲仙国立公園を中心とする雲仙市地域「バイオマスの循環と観光基盤活用による大学協働型エコピレッジ形成と教育」

私たちがESD-Jに入ったわけ

大阪・西淀川「公害地域の再生」にむけたESD

財団法人 公害地域再生センター (あおぞら財団) 林 美帆

30年前から20年間続き、10年前に解決した大気汚染公害裁判。大阪・西淀川地域の裁判は公害患者さんの勝利で解決しました。西淀川公害裁判の特徴は、車の排気ガスによる健康被害が認められたことですが、それだけでなく、公害地域再生のために裁判の和解金から、あおぞら財団 (財団法人公害地域再生センター) をつくったのも大きな特徴です。

あおぞら財団は設立から10年です。まちづくりや環境学習、「西淀川・公害と環境資料館」の運営、公害患者の保健事業、国際交流など、持続可能な社会をつくるために試行錯誤を重ねてきました。「公害地域の再生」というテーマ自体がESD的であり、ESDという言葉を知らないときから活動を行なってきましたが、ESDという新しい切り口によって、より一層、地域や地方自治体との新しい連携を生みだしていきたいと願っています。

大阪府立西淀川高等学校と連携して環境教育を行ない、「公害患者さんのお話を聞く会」などを開催している。



2007年4月から9月の活動報告

- 4月15日 第1回地域コーディネーター会議
- 4月26-29日 韓国の統営(トンヨン)市にて、AGGEPの第2回会合
- 5月1日 参議院議員選挙へむけた5政党への公開質問状の実施
- 5月19日 第2回地域コーディネーター会議
- 5月19日 2007年度 第1回理事会
- 6月16日 地域ESD共有サイト開発会議
- 6月16日 第1回国際ネットワークカフェ～ローカルアジェンダ21とESDのかかわりを語り合う～
- 6月17日 ウェブサイト企画ミーティング
- 6月17日 ESD-Jの2007年度通常総会
- 6月17日 ESD-J公開セミナー～ESDをめぐる最新事情～
- 6月18日 研修PTミーティング
- 6月22日 韓国ウイジョンブ21とのESD学習会
- 7月10日 第2回国際ネットワークカフェ～国境をこえるボーボキ～
- 7月10、16日 シナリオ抽出ワークショップ in 板橋
- 7月26日 第7回ESD関係機関情報交換会議
- 8月10日 環境省「ESDの10年促進事業」で新たに4地域が採択
- 8月7-9日 茨城県教育委員会 ESDの教員研修
- 8月24日 情報PTミーティング
- 9月3、14日 日能研職員むけESD入門講座
- 9月16日 国際PTミーティング
- 9月17日 政策提言理事ミーティング
- 9月26日 環境省「ESDの10年促進事業」H19年度キックオフ会議
- 9月27日 経団連自然保護協議会ESDセミナー

編集後記

ESD-Jで働きはじめて3ヵ月になるが、毎日宮益坂で目につくのがタギングと巨大落書きである。長い攻防戦の末に、今の状況になったのかも知れないが、どうにも消そうと努力しているふうにはみえない。毎日積み残しの仕事を横目に疲れて帰路に着くたび、落書きを消したい衝動と戦っている。溶剤をシュッと吹きかけ、サッと拭きとる感覚はなにもかえがたい快感なのだ。(後藤奈穂美)

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

URL <http://www.esd-j.org/> e-mail: admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F

TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554

● 会員募集中: 正会員 (10,000円)、準会員 (3,000円) 詳しくはHPをご覧ください ●

